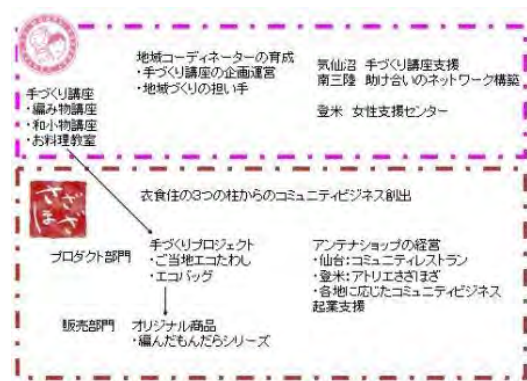
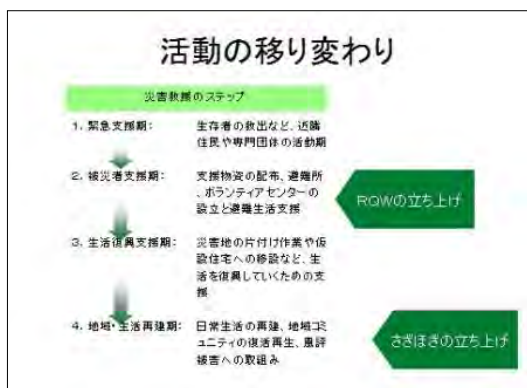


◆ワークショップ「あなたの“気づき”が仕事につながる」

ファシリテーター：足立千佳子さん（特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラム理事）

「まちづくりを専門に勉強してきたわけではありませんが、特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラムに参画し、協働のまちづくりなど幅広い体験を積んできました。普通の主婦だった私が、それでもいまこのようにいろいろな活動ができているのだから、どなたにでもできます。大丈夫ですよ」と語り始めた足立さん。

足立さんは、東日本大震災後、すぐに RQ 被災地女性支援センターを立ち上げ、女性を中心とした被災者救援活動に取り組んできました。そして、現在は、これらの活動から派生した「さざほぎ」という新たなプロジェクトを主宰しています。



【足立さんのお話】

RQ 被災地女性支援センターは宮城県登米市に拠点が置かれています。登米市が拠点となった理由は、津波被害の大きく緊急支援の手が必要だった気仙沼・南三陸・石巻といった被災地に、それぞれ1時間半くらいで行けるからです。一日に何往復もするには、出来るだけ被災地に近い地に拠点を置くことが大事でした。だから、登米市には他にもいろいろなボランティア団体が拠点を構えました。二次避難所や仮設住宅もできました。

震災後すぐに現地に行き、ボランティア活動をしている中で、避難所での暮らしに、女性の視点が足りないということを実感しました。南三陸近辺、沿岸部のお母さんたちというのは、奥ゆかしいというか、遠慮深いというか、外に出るとお父さんを立ててあげる。だから、避難所などでも女の人の声が表に出てこないのです。避難所では間仕切りもありませんから女性は布団の中で着替えている。おかしいでしょう？「雨露しのげるだけでも幸せ」なんですか？ お母さんたちは何も言えない。お父さんたちも、「おれたちはみんなファミリーだから、間仕切りはいらない」なんて言っている。それもおかしい。

そうしたことを見聞きしているうちに、避難所や、その後過ごすことになる仮設住宅での被災女性支援の必要性を痛感し、昨年6月に RQ 被災地女性支援



センターを立ち上げました。

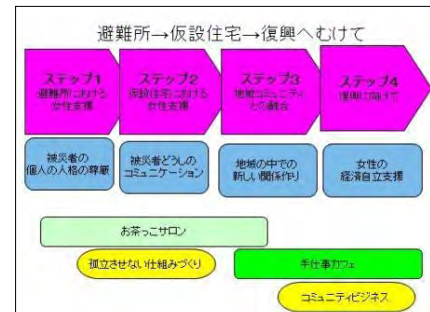
それに先立ち、昨年4月時点で「避難所→仮設住宅→復興へ向けて」どんなステップが必要となるか、私なりの仮説をたてました。

まずは「避難所から仮設住宅に向けて」がステップ1です。間仕切りもないような避難所生活における女性支援。つまり、被災者の人格、尊厳を守ろうということです。

ステップ2は「仮設住宅における女性支援」。仮設住宅にはいろいろな地域の人が集まります。集落が違う人たちが集まる中で、被災者同士がうまくコミュニケーションできるような工夫が必要です。

ステップ3は「地域コミュニティとの融合」。登米市にもとからある集落と仮設のコミュニティとが、「登米」という地域の中で新しく関係を作っていけるようにすることです。

そして、ステップ4は「復興に向けて」。ここで、女性の経済的な自立支援が必要となります。



このような仮説を立てて、ステップ1～3までは「お茶っこサロン」（孤立させない仕組みづくり）、ステップ3～4は手仕事カフェ（コミュニティビジネス）という場を提供してきました。

お茶っこサロンでは、手づくり講座などを行い（2011年9月22日～2012年5月31日までの間45か所、139回、1,594人参加）、2時間で何か自分のものを作って持ち帰ることができるということで楽しんでもらいました。仮設住宅の集会所や地域交流の施設、みなし仮設住宅（一般の借り上げアパート）などで開催し、編み物や縫物、その他のモノづくり、料理など趣味や憩いの時間を共有できる暖かい交流の場となりました。



そうこうするうち、お茶っこサロンの活動を通じて出会ったお母さんたちと、手作りしたモノを自分たちのブランドにしようという話になり、「さざほざ」ブランドを立ち上げることになったのです。

「さざほざ」とは、宮城の方言です。ある友人が、忙しく苛立っている人たちを見ると、よく「さざほざとすっぺし～（わきあいあいとしようよ）」と口癖のように言うのですが、この言葉、大好きです。震災後、お母さんたちと手作りブランドを作ろうと活動していた昨年6月頃は、ど

こを見ても「がんばろう」的なスローガンが多くて、逆にそれで苦しくなっていました。そんなとき、あの言葉、「さざほざとすっぺし」を思い出し、これをお母さんたちと共にやりたいなと思い、「さざほざ」プロジェクトをスタートさせました。

「さざほざ」は、エコと郷土愛にあふれた東北発信ブランドを確立し、製造・販売することで、地域の活性化と現金収入を生み出す事業を創出することがミッションです。

もともと、RQ 被災地女性支援センターは、地域コーディネーターの育成が中期的目標でしたが、それとは一線を画して、衣食住の3つの柱からのコミュニティビジネス創出という目的の下、本年6月に「さざほざ」が独立しました。

「さざほざ」の目指すことは次の3つです。

- ・被災地の復旧、再生、復興のプロセスを、地域に暮らす人の視点で具現化させる。
- ・具現化させるためのエンパワーメントのために手仕事を通じて経済活動を実践する。
- ・東北の暮らしの知恵を次世代、他地域に伝え、相互扶助の精神を養うきっかけとなる商品づくりに取り組む。

また、さざほざの活動の柱は、「(1) 被災地に暮らす女性たちの手仕事づくり、(2) 宮城の食のあり方、(3) 被災地の今を発信する」の3つです。

そして、さざほざのブランドの一つが、アクリル毛糸で編んだオリジナルデザインのエコたわし「編んだもんだら」。気仙沼、南三陸のお母さんたちが作っています。タコ、イカ、マンボウ、ヒラメなど、それぞれの地域の特産物をオリジナルのモチーフにしてお母さんたちに編んでもらっています。また、東松島市小野駅前仮設住宅のお母さん達がつくっているソックモンキーの「おのくん」の販売のお手伝いや、仙台市内のみなし仮設住宅にお住まいの方達の手仕事サークル「Myetle(マートル)」さんの商品開発支援なども行っています。



<足立さんとおのくん>



<おのくん>

登米市には美味しいものがたくさんあります。それを仙台で食べようということで始めたのが、コミュニティカフェ「うれしや」です。今年5月にオープンしました。営業日は毎週火曜、水曜、金曜。和室もあり、そこをコミュニティスペースとしています。



【ワークショップ】

足立さんのお話はここまでで、いよいよワークショップです。

「みんなの思いを「見える化」しよう！」

グループは6つ。グループにはあらかじめ、笹かま、ずんだ、青葉、広瀬、けやき、七夕の名前が付けられていました。足立さんから「3つの平等（時間の平等、意見の平等、立場の平等）」、「3つの自由（アイデアの自由、量の自由、便乗の自由）」というルールの説明があり、いよいよワークショップの始まりです。

●お宝たっぷり自己紹介＝資源を出し合う

まず、個人ワークでそれぞれが自分の関心事、趣味、活動、困っていること、問題に思っていることなどを付箋に1つずつ書き出しました。それから、書きだした付箋（自分のお宝＝資源）を模造紙に置きながら自己紹介です。



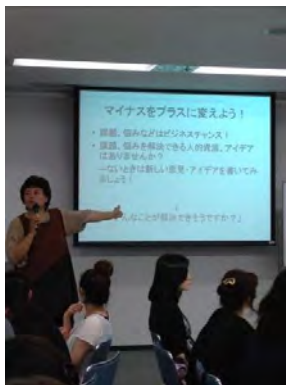
●お宝分析＝資源の整理

皆で出し合った自己紹介の付箋を見ながら、似ているものを一括りにし、それぞれにタイトルをつけ、資源の整理をします。今日初めて出会ったメンバー同士、次第に熱い議論が展開されていきました。



●ビジネスチャンスを見つける

次に、皆で出し合った資源の中にどのようなビジネスのタネがあるか考えます。「悩みや問題などのマイナス要素も見方を変えればビジネスチャンスなんです」という足立さんのアドバイスを聞きながら、どのグループもさらに議論は深まります。



●15秒コマーシャルを作ろう

グループを疑似会社に見立て、皆で出し合ったアイデアを絞り込み、「どんな会社で、何を提供するのか」、アピールするポイントを考え、まとめます。それを15秒のコマーシャルにし、発表のための準備開始です。

